プロフェッサー・マンクス

蝉羽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロフェッサー・マンクス

【Nコード】

N9678F

【作者名】

蝉羽月

【あらすじ】

猫と話ができる青年「僕」と、哲学者・猫先生との交流。猫先生は人が好きで、様々な悩みを持った人を人間とはちよつと異なつた視点から考えていく。「僕」は猫先生の通訳をしたり、時には意見を対立させて議論をしたり、人間とは違う世界を垣間見たりする。

プロローグ

寒さの中では、すべてが停止する。独り言を呟く猫背の老人も、大正期に闊歩していそうな額縁眼鏡の文学少女も、ほっそりした感のある某国成金観光客も、一様に顔を硬直させている。この街では、一年の半分ほどが冬である。それでも、都市は眠らない。すすきの界隈はイカ釣り漁船のような光に満ちている。赤いネオン、オレンジのネオン、黄色のネオン。暖色系の灯りは散り散りの通行人を捕まえて、加工して、夜明けと共に吐き出す。捕獲・加工・排出という循環の繰り返し。でも、もちろんイカ達にも自由意志と呼ばれるものはあって、何も集団に合わせてまとまる必要はまったくない。ないはずなのに、気がつけば足は同じ方向に向いている。そんなものかな、と思う。僕だって常にナナメ上に座つてられるわけでもない。一歩外に出てしまえば、イカになる。触手を伸ばして、はつきりしないモノを求めて、光に向かって遠泳スイムするのだ。

僕は街の喧騒を、マクドナルドの二階から見ていた。店内にはカラオケのナイト・パツクが適用される時間までのつなぎをしている学生や、残業終わりに一服する会社員、何やら書き物をしているお姉さん、等々、多様な人種で飽和状態だった。…僕？ああ、僕は独りでここにいる。丸テーブルの上にビッグ・マツクのセットメニューを置いて、ある人の到着を待っている。その人と僕は去年の夏に知り合つて、以来ずっと交友を暖めていた。大切な人だ。あえて、人の方にアクセントを置きたい。僕にとってその人は先生であり、良き友人であり、恩人だった。

喫煙コーナーから、煙草の臭いがこちらに流れてきた。煙の方に眼を向けると、スレンダーな女の人が頬杖をつきながら煙草を吹かしていた。目元の彫りが深く、髪は茶髪で、化粧はやや濃い。ドイツ映画に脇役で出演していそうな印象だ。ドイツの映画はさすが哲学者を多く産んだお国柄だけあって、愛だとか生と死だとか性だと

かの重いテーマを、ポップでアキュアルでリズムカルに表現する。その女の人は、どこか鬱な雰囲気があったけれど、遠目には健康的に見えた。矛盾している見方だけれど、そう見えたのだから仕方がない。

その女の人を横目に見ながらすっかり冷めたコーヒーを口につけた所で、待ち人がやってきた。とことこと。

「やあ。お待たせしました。こちらは冷えますね。お変わりありませんか？」

「ええ。元気でやってます。先生も、元気そうで何よりです」

「先生はやめて下さいと、何度申し上げれば聞いてくれるのですかね」

「たぶん、ずっと変わらないままです。一度呼び方が定着しちゃうと、どうも」

「私のような放浪猫を、対等に扱ってくれるのはうれしいのですが…持ち上げられるのは、苦手です」

彼、先生は、猫だった。イギリス生まれの、マンクス種だ。全体に丸い体に、ぴよこんと短い尻尾がついている。灰色に、黒の縞模様。ちよつとした風格が感ぜられる猫だ。

猫が話をするというのはおかしいと思われるだろうか？…確かに、普通ではない心配がする。しかし、そもそも論で言えば、人間が言葉を介して話をする事自体がおかしなことなのだ。我々・人間は意識を持つと言う。理性を持つと言う。その意識や理性がどこにあるかと言えば、脳だ。そして突き詰めれば、脳を構成するニューロンの化学伝達物質。これが意識を作りだしている。無機質から生まれる、熱さを持った意識・理性。やがてそれらは経験で磨かれ、言葉を得て、自分以外のモノと結びつく。小さな奇跡。大きな飛躍。

以上、猫先生からの受け売りである。

言語コミュニケーションが自然に対する突然変異であるとするれば、ある程度のシステムさえ出来上がっていれば人間以外でも言語を展させることが可能なのだ。

「今回は、どこに行ってきたんですか？」

猫先生は、旅行好きだった。元来が、英国人は行動派である。

「ボスニアにね、行ってきました。牧草地が広がっていて、時々、白煉瓦の家が並ぶ。人々は昼からコニヤックを呑んでサッカーを観戦してる。素朴でゆるりとした国でしたよ」

「ボスニアっていうと、東欧ですか。英語、通じなかったでしょ」

「そこはほら、身振り手振りで」

四足歩行の猫がどうやって身振り手振りをするのだろう。

「それはそうと、Sさんにお問い合わせがあるんです」

「大方、そんなところだろうと思ってました。何です、今度は？」

「通訳です。というより、仲介と言った方が正確なのですかね。あ
る人と会って欲しいのですよ」

「久しぶりだな、こういうの」

「内容は、結構シリアスなんです」猫先生は僕の対面の椅子の上
にぴよんと跳んで、伏せの状態になった。「その人は、自殺志願者
です。私は、それを阻止したい」

1：予定調和

「ずいぶんと、似合わないことを言いますね」

僕は少々の皮肉をこめて言った。自分には、加虐趣味の傾向があるのかもしれない。

「と、いいいますと?」

「自然界は、弱肉強食こそが摂理じゃないですか。ちょっと油断したら、食べられる。もしくは飢えてしまう。厳しい場所です。そんな闘技場みたいな所の出身である先生が、感傷に流されて慈善事業なんて、すこぶる意外です」

「うん。やはりあなたが適役だ」

猫先生は僕の言を全く気にしていないようだった。毛づくろいなどしている。僕は周囲の眼が気になつたけれど、誰も彼も我が事に夢中で、飲食店に動物がいることを気にかけている様子ではなかった。他人のことなど真剣に見てはいないのだ。

猫先生は後ろ足で首元を掻きながら言った。

「私は確かに自然に近い場所にいます。けどね、今の私がここにあるのは、それなりに経験を積んできたからです。ジョン・ロツクを知っていますか?」

僕は頷いた。ロツクなら、高校の時に倫理で勉強していた。ロツク『市民政府論』 ロツシーと覚えたものだ。

「生まれた時には我々は白紙の状態である。そこに書き込みをすることで、人格と呼ばれるものができあがる。よって、より良い人格を作るためには、良い経験と洗練された見識を獲得せねばならない」と、こうです。私は経験論者なんですよ」

「それで?」

「それで、私の経験は、ヒューマニズムに深い関わりがあるのです。先ほど、ボスニアに行ったと言いましたね。ボスニアは、90年代に最悪の民族紛争が起こった場所なのです。何が最悪だったかと言

えば、見境がなかったことです。軍人も、民間人も、戦場ジャーナリストも何もありません。憎しみが憎しみを生んで、死体が死体を生んで。私が赴いた時は大分回復してきていましたが、やはり、違うんですね。長い間平和とされている地域とは」

「だから、命を大切にしろと。生きたくても生きられない人がいるんだから、警沢を言うなと主張するわけですか」

「ふふ、いえいえ。これはあくまで私の人生観ですよ。これを他人に強制するのは不快だし、ナンセンスです。その点はわきまえてますとも。さて、純粋なボランティアなんです、引き受けていただきますか？」

「構いません。詳しく話してください」

猫先生は、笑ったようだった。顔の筋肉が痙攣しているだけのようにも見えた。ここは文脈から判断して笑ったことにしておこう。

それから、自殺願望のある娘のことを話し始めた。

先生とその女の子、夏原菜月なつはらなつきは、一週間前に知り合った。というより、夏原が路上でうろついていた先生に、一方的にお菓子をあげたのだ。肉食である先生は渡されたビスケットが苦手だったのだけれど、頑張ってしゃりしゃり食べた。誠意を無碍にしない人なのだ。

夏原女史は、ビスケットに四苦八苦する先生を見て、二枚目からは小さめに割ったものを渡した。先生は、今度は楽にそれを食べた。彼らがいたのはすすきの裏通りにある小さな駐車場で、平日の昼間であった。遠くで鳥が鳴いている。トヨタと日産の高級車が停まっている。「猫と陽だまり」という題で自称・印象派の画家が描いていそうな光景だった。夏原はそこで、人に話しかけると同じ調子で、先生に語り始めた。

自分が、市内の大学に通う女子大生で、風俗の店にも勤めていること。家族や友人には風俗に偏見のある人が多いから、それは秘密にしていること。近頃、ひどい虚無感に襲われて、やるせないこと。その虚無感について、特に理由は思いつかないこと。誰にもそれは話していないこと。いっそのこと。エトセトラ。彼女は以上のこ

とをほとんど間断なく語り、三枚目のビズケットを置いてさつき去った。手を振って、「ありがとね。猫くん」と言いながら。

僕はその話を聞いて、何か問題があるだろうか、と思った。今どき、ぼんやりした虚無感を抱く人なんて札幌ドーム何個分もいる。そのうちの何人が成功してしまうかは不明だけど、そんなに数は多くないだろう。警察白書にある自殺の理由でも、ぼんやりとした不安は「その他」に分類されるものだ。そうした統計上のデータを取り除いたとしても、大学と風俗を掛け持ちするタフな生き方をする人が、そうそう自ら命を絶とうとするはずがない。

「彼女には、一飯の恩もありますからね。とにかく、話だけでも聞いてみてくださいな」

「大学が同じだけど、接触するのが難儀ですね。僕は法学部、彼女は理学部。かち合いません。何か作戦は？」

「ああ、それなら心配には及びません。すべては予定調和です」

猫先生は喫煙席の方を向いた。僕も目線を上げ、同じ方向を見た。さっきの女の人が立ち上がって、トレイをゴミ箱に持っていく所だった。彼女は、僕と猫先生の視線に気づいたのか、くるっと首を回して、こちらを見た。はじめに僕を。まともに眼が合ってしまったので、僕はすぐに眼を逸らせてしまう。ポール・ニューマンなら眼を逸らさないで、この後何らかの展開があるのだからうけれど、ちょっと無理だ。一瞬見えた彼女の眼は茶色がかっていた。次に彼女は少し視線を下にして、猫先生を見たようだった。それから、一瞬迷ったようだったけれど、我々のいる方に歩いてきた。僕はそれを周辺視野で確認した。

「ねえ、その猫って、君の？」

2：ファースト・コンタクト

夏原菜月なつはら なつきは、物怖じすることなく、気取ることもなく、本当に興味本位という感じで、訊いてきた。わたしは、ただの好奇心からマクドナルド＝資本主義の象徴、に入り込んだ猫のことを質問しているだけなのだ。したがってあなたも、余計なことは言わず手際よく答えて欲しい、と。

「僕の猫、というわけじゃないんだ。ちょっと説明しづらいんだけど」

「これと似た猫に、いつだったか私ビスケットをあげた気がするの。でも、飼い猫だったら違うかな、って気になって」

彼女の記憶力は大したものだ。それとも、よほど気になっていたのだろうか。自分のことを話した猫のことが。

猫先生はあくびなどしている。彼女はそれを見て頬を緩ませ、それから隣のテーブルから椅子を運んできて、我々の傍に座った。

「ちょっと話をしても良いかな？バイトまで中途半端にひまなの」
事後承諾だ。時計は、午後の十時を廻っていた。どの程時間が余っているのだろう。この時間から出るバイトと言えば、確かに限られてきそうだった。

「君は大学生？」

それから、僕と彼女は一通りの自己紹介をした。大体は、猫先生から聞いていたことと同じだったけれど、流石に悩みがどのころのということとは話さなかった。夏原は、よく笑う娘だった。笑うと丸いほっぺたにえくぼができた。遠くで見ると、随分と幼い印象があった。紺のコートに、タータンチェックのロングスカート、レザーブーツ。服装や雰囲気は完全に大人なのに、顔だけが濃いめの化粧についていていない。逆に彼女が、そうしたずれのような所に魅力があると計算している可能性もあったのだが。

話しぶりから察するに、彼女は猫と話ができるわけではなさそう

だった。時々、猫の背を撫でてあげていた。猫先生は特に不満もなさそうだ。僕は自分の能力のことを黙っていることにした。何といつても今回は、彼女が主役なのである。

「でも、どうしてお店に猫を連れ込んでいるの？飼い猫でもないのに」

「ああ、実験を試してみたくなっただよ」

「実験？」

僕は自己紹介をしている間に頭の中ででっちあげた、猫先生のごまかし方を話す。

「そう。実験。世の中にはさ、これをしちゃいけない、あれをしちゃいけないってことがたくさんある。人とぶつかるから廊下を走っちゃいけない。電話のマナーとして、相手が不快になるから、電話をかけた方が後に通話をきっちゃいけない。とかね。でも、マナーとかルールとかいうものって、本当に破ったら良くない結果が起こるものなのか。破ったとしても、実はそんなに大したことじゃないのではないか。というわけで、飲食店に猫を連れ出してみました」

「ひどい理屈」

「仰るとおり」

「実験の結果は聞くまでもないね。ちらちらこっちを覗く人もいるけど、何も声がかかってこないし。さて、じゃあ、君と猫くんはどいう関係なのかな？」

僕はすっかり氷が融けて薄まったジンジャーエールに口をつけた。

夏原は、目を逸らさない。

「てか、敬語使わないんだね」

「そうだねえ。気になるなら、直すけど」

「いや、いや。僕も角ばったのは苦手なんだ。ところで、バイトの時間は大丈夫なの？」

夏原は右手にした腕時計を見て、ああ、と軽く溜息をついた。ごめん、出るね。と言って、シヨルダーバッグを掲げて席を立った。最後に、猫先生の頭を軽く撫でた。

僕は二階から彼女が歩き去っていくのを見送った。イカの流れに加わった彼女は、発光しているように思われた。きつと、僕と彼女の間につながりができたからだ。ウォーリーを探せみたいなものだ。「やっぱり、特に問題なさそうじゃないですか。人当たりも良かったし、頭も顔も悪くない」

「あなたは偏見を持っていきますね。彼女のような奔放で朗らかそうな人間が、鬱々とした悩みを抱えているはずがないという」

「別に決めつけるわけじゃないです。けれど、どうしても深刻なようには見えない」

「それは、彼女に信用されてないからです。ずっと、眼を逸らさなかつたでしょう。相当疑われてましたなあ」

「声をかけてきたのは向こうですよ」

「わからないから、気になる。疑うから、確かめる。考えるから、剥げる」

「何ですか、最後の？」

「人間の行動と外見には、理由があるものですよ」

「さいですか」

「さいです」

僕と先生は店を出た。十一月の頭に、初雪が降った。初雪は根雪になって、今も舗装された路上で氷になって残っている。踏みしだかれ、ほとんど茶色に変色していた。猫先生とは方向が逆だったの
で、僕達は店の前で別れた。

僕は i Pod の電源を入れて、音楽を聴きながら帰った。ランダム再生にしたプレーヤーからは、ニルヴァーナの『Smells Like Teen Spirit』が流れてきた。

僕が学生寮へと帰ると、丁度、鹿志村^{かしむら}さんがロードワークから帰ってくるところで、「よう」と声を掛けられた。僕もあいさつを返した。がっしりした鹿志村さんの身体からは湯気が出ていた。さらに、ちよつと臭った。

ここで、学生寮およびその住人について、簡単に付記しておく。

僕が暮らす学生寮は築33年の老舗である。ただ、何年か前に耐震の問題が取り上げられた際、いちはやく改築と増築を行ったため、建物自体はかなり近代化している。乳白色で塗り固められた壁、掃除が行き届いた廊下、八畳もある一人部屋。二階建てで、現在は十二人の学生が生活している。鹿志村さんも住人の一人だ。鹿志村さんはH大学の理学部修士課程の一年目で、遺伝子の研究をしているらしい。大学三年まで柔道をやっていたので、力強い。そして、やや粗雑なところがある人だ。鹿志村さんの部屋からは時々酸いた臭いが漂ってくることもある。「混沌の中からこそ何かが生まれるんだ。エントロピーは増大するんだ」と訳のわからないことを言っている。

「今、谷田やたの部屋でみんな呑んでるんだが、お前も来ないか？」

鹿志村さんが誘ってきたので、僕はありがたく加わることにした。寮では、不定期で宴会が開催される。というか、理由がなくてもよく集まって飲む。谷田とは、工学部の二年生である。二十年間彼女ができず、もんもんとした日々を送っている。二人いる姉の少女漫画を乱・愛・熟読しているせいだと思うのだが、口には出さない。「面子は、どんな感じですか？」

鹿志村さんは谷田の部屋にいる（と思われる）人の名を挙げた。白須しゆすさん。文学部の四年生で、放浪癖と浮気癖がある。谷田とは親友のような付き合いである。音沢おとさわ。経済学部の二年生。ミスター・コンプレックス。彼はあらゆることに自意識過剰に反応し、人間不信になっている。その割には付き合いの良い奴である。見ていて面白いタイプだ。

僕と鹿志村さんは連れ立って、谷田の部屋へ入った。あるうことか、鹿志村さんは汗まみれの身体のままだ。僕の気分を察したのか、「いいんだ、どうせ脱ぐから」と、にいつと笑って鹿志村さんが言う。何故この人は飲み会の前に走っていたのだらう。本人に直接質

問してみても良かったが、やめておいた。鹿志村さんがこちらの質問の意図通りに返してくれる確率は、大体三分の一くらいだからだ。確率というより、回数制限と言う方が的を射ているかもしれない。公園の人気ブランコ順番待ちのようなものだ。さつき乗ったから、次はちよつと待っていてね、という。僕はいざという時のために、貴重な機会をとっておくことにした。

ドアを開けた瞬間、熱気が具現化したように思えた。暖房をきかせ過ぎである。白須さんと谷田が肩を組んでいた。音沢は回復体位のまま眠り込んでいる。できあがり過ぎである。

「あつ、鹿志村さんが帰ってきたー！…ん？あわー！Sさんもいる」

谷田が叫んだ。どこかに出征していく学徒のようだ。モルジヴあたりに。

「お帰りつす。もう、鹿志村さん逃げないで下さいよ。こっちは大変だったんですから」

白須さんがぼやいた。学徒の出陣を嘆く経営者のようだ。軽井沢あたりで。

それから、僕は早速、買い出しを命じられた。まあ、遅れ参加だし、仕方がないと思って、近くのコンビニに買い物に出た。ビールとつまみを買って戻ると、今度は谷田が寝入っていた。谷田と音沢の二年生コンビは、酒に弱いのだった。僕は谷田をどけて、いそいそと炬燵に入り込む。鹿志村さんは、脱いでいた。

「さつきはどこ行ってたん？」

白須さんが訊いてきた。

僕は猫先生のところだけ伏せて、H大の理学部の女の子と軽く喋ってきたんです、と答えた。白須さんは、ふうんと相槌を打った。

僕は鹿志村さんに、三年生の夏原という娘を知っていますか、と訊いてみた。回数制限を、ここで解除したわけだ。

「わからん。二年ってことは、まだ研究室分属もしてないだろ？どうしても知りたいってなら、俺がそれとなく調べてやってもいいが」

「お願いできますか」

「何っすか！恋バナですかっ！！はい、はい、僕も聞きたいです！」

谷田が目覚めた。うぜえ。

「そうやって、何でも恋愛に結びつける恋愛至上主義はよろしくないぜ、谷田くん。恋愛の話をしたがるのは、本当に恋愛をしたことがない者だけであるっていうだろ」

「言いませんよ。聞いたこともないです。白須さんなんか、ばんばん聞かせてくれるじゃないですか、武勇伝を」

「白須さんは別だよ。何か、次元が違うじゃんか」

「褒め言葉として受け取っておこうかな」

「白須さん、生まれる時代が遅すぎるか、もしくは早すぎましたよね。失われた世代ロストジェネレーションの頃なら、多分英雄ですよ」

「今じゃ戦犯だがな」鹿志村さんが続いた。「とりあえず、その、な…なんとかって娘のことは任しとけ」

「夏原です」

とりあえずの見通しはついた。後は、なるようになればいい。今回の件に猫先生はこれ、という指示を出してこなかったから、とりあえずは一任されていると判断していいだろう。それから僕は鹿志村さんが下まで脱ぎだそうとするのを止めたり、起き出した音沢のきびコンプレックスを熱心に聞いたりした。

3：つながり

翌日から僕は鹿志村さんの連絡待ちになった。僕は大学に出て司法試験出のエリート教授の講義を聴き、図書館にこもって適当な本を読んだ。学校が終わったら、駅ビルで新作CDをチエックしたり、ニット帽などの小物を選んだり、音沢の誕生日に向けたネタ探しをした。鹿志村さんへだったら、アロマテラピーのセットを渡すのだが。

時々、猫先生とも話をした。猫先生は学会があつて、札幌には何週間か滞在するらしい。猫と話するには、猫の方にもまた特殊な能力が必要なようで、猫学会に参加する猫たちは、大方がその能力を身につけた者だそうだ。恐ろしく胡散臭い話だ。優秀な頭脳を持った猫たちは、人との共存、歴史、二足歩行の可能性などを議論する。国を持たない猫たちは、政治にかまけることなく、会議を開くことができる。また、学問の分類もしないから、議題は哲学から科学、宗教、経済（猫に経済があるのだろうか？）など多岐に渡る。ちなみに、猫先生は、「おこぼれ頂戴の功罪」という題で一席打つそうだ。

僕と猫先生は、学生寮の部屋にいた。ホット・ミルクが冷めるまでの間、先生はその概要を語ってくれた。猫舌なのだ。

「つまり、たった一度きり、食べ物を人から分けてもらっただけでその猫は依存心がついてしまうのです。自分で餌をとろうという気概がなくなってしまう。これは由々しきことです。確かに、近年は都市が衛生化され、獲得できる餌は減少しています。ならば、人から食べ物をもらっても良いではないか、とこうなる。しかし、善意に依存した先には、何があるでしょうか？食べ物をくれる人は、我々との格差を隠そうとしない。安全な地域から危機を救おうとする人は、ほとんどが気まぐれです。自分の立場を危険にしてまで、我々を助けようとする人はごくわずかでしょう。そうなった時に、ま

だ依存関係を引き摺っていたら、お互いに不愉快なことになります。そこで、食べ物をもたらすのは仕方がないとして、きちんと格差を意識することが大切です。今回はたまたま、この人はこういう立場から私にモノをくれたのだ、とね。まあ、理想論ですが」

「先生は、慈善行為をほとんどがきまぐれで、偽善だって言いたいわけですか？」

「ふむ。いいですか。善には四種類あります。やる善、やらない善、やる偽善、やらない偽善です。一切の留保なく、善を実行するのがまず一つ。これは神様の領分のような気もしますね。マザー・テレサなどはかなり近いことをやったのではないですか。続いて、やらない善。これはカント氏がかなり頭を悩ませましたね。すべからく行為が利己的であるなら、いつそ何もしない、と。さて次に、やる偽善。これは、実にプラグマティックです。心の底でどう思っていないようと、実際に助かる人がいるならいいではないかという。やらない偽善に関してはいいでしょう。あらゆるものを疑いすぎて身動きがとれなくなっている状態です」

「なるほど。やる偽善っていう風に聞くと、悪くないですね」

「そうですね」

猫先生はミルクを舐め始めた。この寮では、寮長夫妻が犬を飼っているため、ペット持込が可なのである。白須さんは金魚を。音沢はハムスターを飼っている。猫先生は寮長夫妻の雑種犬とよく喧嘩をする。犬と猫の喧嘩に和解はなくて、それは言語が異なる点が大きいのだと思う。互いが互いを知る術がないから、正面切ってぶつかるしかないのだ。

僕はテレビを点けた。アナウンサーが平坦な声で報告をする。二十条界隈のコンビニに強盗が押し入った。中東の首相がアメリカに文句を言った。不動産関係の会社が脱税をした。派遣切りに反対する市民運動があった。どうして、明るい話題を振らないのだろう。

我々は「不思議ですねえ」と言い合い、それから二人で午睡をしていた。

鹿志村さんから連絡が入ったのは、飲み会のあった日の四日後だった。うまいこと取り成してくれて、夏原とはある喫茶店で待ち合わせる段取りになった。

指定された喫茶店に行くと、夏原はすでに到着していた。今日は化粧を取っている。店内は狭く感じた。壁には、ビールズやクリームやレイ・チャールズなどのジャケットが隙間なく貼られていて、BGMにドアーズの『ハートに火をつけて』がかかっていた。僕が彼女の前に座ると、読んでいた本を閉じて「やっほう」と言った。僕は彼女に笑いかけた。

「何を読んでいたの？」

「これ？ヘミングウェイの『日はまた昇る』」

「僕も読んだ。何か、自由な時代の話だね」

「うーん、そうは読めなかったなあ。もっと、いろんなものに縛られてた人たちの話だと思うけど」

「ふむ。こういうずれがあるから、人との会話って面白いよね」

「そうかもね」

僕はアメリカンを頼んだ。コーヒーは恐るべき速さで出てきた。彼女は小首を傾げて、何故わたしに会いたかったの、と訊いた。ロングの髪が軽く揺れた。そこで、僕はあらかじめ用意しておいた答えを返す。

「僕は小説を書いているんだ」

「へえ」

「それで、ちょっと題材に困っていてね。いろんな人から話を聞いている。もしよければ、君からも話を聞きたいと思って」

「でもわたし、そんなに大した話できないよ」

「何でも良いんだ。前に、何かバイトをしていると言ったね？そのことでも」

彼女はレモンティーに口をつけて、射るように僕を見た。からんと氷が音を立てる。…あれ？ドアーズ。ドアーズはどこに行った？

「わたしのバイトのことを、誰かにきいたの？」

「いや、別に。ただ何となく思いつきで」

彼女は逡巡しているようで、ちようどレイ・チャールズが掛けられている辺りに視線を走らせ、んー、と眉根を寄せた。僕は辛抱して待った。

「わたしの勤めてるお店って、ちょっと変わってるのよ。小説のネタとしては面白いかもしれないけれど、プライバシーに関わることだから」

「脚色してくれて構わない。僕も、そのまま書くわけじゃないから」「説明しづらいなあ。じゃあ、今日お店に来てみる？値段は張るけど」

あっさり了解が取れたので、即答できなかった。彼女の表情は僕を試しているようでもあり、何も意味していないようでもあった。

最初の、第一印象を変更しよう。読めない娘だ。

だが、とにもかくにも、選択肢はなかった。行くしかないのだ。ここで断れば夏原は離れてしまうし、そうなれば猫先生との契約遂行も危うくなる。一度心を閉ざされてしまうと、容易にこじ開けられないものだから。

僕は深く頷いた。

4：壁の向こうで

夏原の通う店は、本人が言った通り、とても変わっていた。

時刻は、夜の零時前。人通りも車通りもほとんどない裏路地に、「カイン」は存在していた。派手な装飾は一切なく、しなびた飲み屋にも見える。二脚立ての看板に、「1時間 4000円」とだけ書かれている。僕は少し物怖じした。

「どういう店なの？」

僕は財布の中身を気にしていた。

「広い意味では、風俗にあたるかな。入ってみればわかるよ。わたしは裏口から入ることになってるから、またあとでね。あつ、中に入ったら、わたしを指名しといて」

夏原は隣接するビルとのわずかの隙間を、ヒールの音を響かせて歩き去ってしまった。取り残された僕は二分くらい呆然と立ち尽くしていたが、表通りからの喧騒が気になったので、意を決してドアを押した。少し後ろめたい感情がある。金色の取っ手を掴んだ時に静電気が走った。

中に入ると、すぐに受付があり、ボックスの中で中年の女の人が退屈そうにしていた。髪がぼさぼさに拡張していて、紅い厚ぼったい唇、それにやけに光るワンピースを着ている。胸元が大きく開いて、谷間が見える。

「いらっしやいませ。…お客様、当店ははじめてのご来店でしょうか？」

見た目とは異なる丁寧な口調で女が言う。内心と外見は必ずしも一致しないことの見本のような人である。僕は無言で頷いた。どうやら常連以外の客があまり訪れない店らしかった。

「当店では、完全指名制となっております。こちらのメニューから希望するお部屋と、相手をお選びください」女はデスクトップのパソコンを指差す。「お客様のニーズに合わせ、こちらでは“見られ

る部屋”と“見る部屋”の双方をご用意しております」

「何だつて？」

「見られる部屋では、マジックミラーごしに、当店の女の子がお客様を見ます。見る部屋では逆に、お客様が女の子を見ます。つまり、常に片方しか相手の顔を見ることができません。お好きな方をお選びください。ちなみに、会話は自由です。各部屋にマイクが設置してありますので、そちらでお話になってください。料金は、一時間で四千円となっております。お飲み物、お食事は、ルーム料金とは別途になっていきますので、ご了承ください」

よく指導された、無駄と愛想のない対応だった。

僕は“見る部屋”と夏原菜月を選んだ。驚いたことに、夏原は源氏名を「ナツキ」で登録していた。そういうものなのだろうか。

料金を前払いして、指定された部屋に入る。後から注文があるはずなのに先払いとは、効率が悪いなあと思った。部屋には、アロワナでも泳げそうな水槽ほどの大きさのマジックミラー、赤いソファ、マイク、丸テーブル。ご丁寧なことにテッシュがある。照明は薄暗い。柔らかすぎるソファに座って、待った。五分ほどすると鏡の向こうに夏原が入ってきた。セーラー服を着ている。線対称の部屋の向こうで、こちらに向かって手を振った。マイクに向かって、彼女が話しかける。

「きてる？」

「うん。僕だよ。そっちからは、姿は見えてないんだね？」

「そう。わたしとしては、この方が楽なの。見る部屋に入った時は、ちよつと憂鬱ね」

「どうして？」

「いきなり、身なりの良いジェントルマン風の人がズボンを脱ぎだしたら、眼のやり場に困るでしょ。それに、感想を求められるんだもん。やってらんない」

「確かに。しかし、何で君はそんな格好してるの？」

「ああ、これ」

彼女は制服のりぼんをひらひらさせる。

「日本だと、女子高生信者が多いから、最初はこの格好で出るの。希望があるなら、着替えてくるよ。ナースとか、OLとか、ラフな私服ならあるから」

「ラルフローレンはないかな？」

「何それ？」

「アニー・ホールって映画が好きでさ。主演のダイアン・キートンみたいな服装をして欲しい。あえて希望を言えばね」

「ちよつとピンポイントすぎるなあ」

「じゃあ、いいよ。そのまま」

僕はそれから、話すべきことが思いつかないで、黙り込んでしまった。普段なら、思いつくままに話すのだけど、うまく言葉が出てこなかったのだ。音楽もかかっていないから、心音が聞こえてくるほどの無音だった。彼女はその沈黙を、僕が何かを言うための準備段階と捕らえたようで、鏡の向こうでじっとしていた。衣擦れの音までマイクが拾ってきそうだった。あれ？何故こんな所に来たんだっけ？

「猫がさ」

僕はそもそもの原因を話すことにした。ここなら、彼女に意図が伝わると思ったからだ。

「君がビスケツトをあげた猫が、実は人と話ができるっていったら、信じる？」

5：独白

僕の話が終わると、交代に、彼女が話し始めた。それはほとんど独白で、マイクを通して機械的に伝言される彼女の声が、ずっと僕の耳に響いてきた。大丈夫。ちゃんと聞こえている。

「今のわたしなら、大抵のことは信じられる気がする。ありうるかもしれないもんね。あはは。哲学をかじってる猫なんて、漱石みたい。ねえ、わたしの話も、聞いてくれる？（ここで、僕は頷いたのだけれど、彼女に届いたかはわからない）。

わたしは、あきれちゃうくらい平凡な家で生まれて、特に不自由も葛藤もなく育ったの。下に弟が一人いるけど、わたしはずいぶん甘やかされちゃった。高校の時に、遊ぶお金が欲しくてバイトがしたかったんだけど、止められた。勉強がおろそかになるとか、色気づくなつて理由じゃないんだよ。ただ、働かせたくなかっただけ。両親は共働きで、お金はあったからね。お小遣いが値上がりしたよでも、そうやって貰ったお金って、使えないもんなんだよね。しかも、その時付き合ってた彼が、何とも古風な男の子で、デートの費用はあっちが全部持ってた。映画やカラオケや小物を買うくらいだったんだけど、まあそれなりに出費かさむよね。その男の子はずっとガソリンスタンドでバイトしてて、きちんと自分のお金からわたしの分をおごってくれてた。いくらわたしも払うって言っても聞いてくれないんだもん。最初は我慢してたんだけど、だんだん不満がたまつて、ついにはどうしてもよくなっちゃった。別れる時は面倒だったから、携帯メールで済ませたし。彼も、執着せず身を引くのが美学だと思いついたのかなんなのか、あっさりそれで終わっちゃった。信じられる？返信で、わかった、元気で。って返ってきたんだよ。エゴとか思い切りの悪さとか妄信とか、そういうところを全然見せてくれない男だった。

綺麗なものってさ、汚いものを見た後だからこそ、綺麗さがわか

るってこと、ないかな？人を感動させられるものを創れる人って、大抵すごい人生送ってるじゃない？だから、汚いものを取り除かれた世界に放り込まれたわたしは、ああ、って思った。なにも、なんにも綺麗なものを知らないんだなあって。知らないってことすら知らないできたんだなあって。わたしに、まともに、芯からぶつかってくる人、いないんだよ。どこにも。だからわたしの周りの人はみんな模範的で、作り物めいてた。家族も、友達も、ボーイフレンドも。

それで、汚いものを見たくて。なにか、本性みたいなものを体感したくて、風俗関係のお店を探した。行き着いた場所がこのお店。笑っちゃうよね。眼に見えなかったはずの壁が、とうとうしつかりした現実になっちゃった。見ることで、聞くこと。それしかここではできない。触れないし、嗅げないし、舐めれない。ねえ、君から見て、わたしはちゃんと居る？赤いソファーに座ってセーラー服着てグロス塗って…声は届いてる？」

大丈夫、聞こえてるよ。と僕は応えた。

「さっき、鏡越しにズボンを脱いだ人がいるって話をしたよね。その人は、会社では結構な地位にある人で、人望も能力もある人みただった。そんな人が、いきなり下半身裸だもの。頭がはじけちゃったのかなって、最初は思った。でもきつと、その人は冷静だったはずなの。飲み物を頼む時にはちゃんと履きなおしてたし、帰る時も忘れ物なかったし。じゃあ、なんでそんなことをしたかっていうと、不安だったんだとわたしは思う。どうしようもなく。素のままの自分を受け止めてくれるものがあるのか、確かめたかったんだと思う。わたしはそれが理解できたから、わかってしまったから、『やめて』って言った。我ながら情けないほど小声になっちゃったけど、ちゃんと伝わったみたいだった。その人は『悪かった』とだけ言って、それから、当たり前障りのない世間話ですつと明るく話してた。会社での愚痴とか、趣味の将棋とか、奥さんの浪費癖よりももっと話したいことがありそうだったけど、わたしはわざと気づか

ないふりしてた。うんうん相槌を打ってきていたの。わたし自身も、みんなと同じなんだ、って頭の中でぐるぐる考えながら、ね。あの子、人の自殺を止めるのに一番説得力のあることばって何だと思う？」

「一般的には、君が死んだら悲しむ人がいるぞ、ってとこだろうね」「そう。つまりは関係性ね。独りっきりの人なんてそうそういない。勝手に他人を哀しみに引き摺りこむのはよくないってこと。その時こそ、本気でわたしにぶつかってくれと思うの。でも、その関係性が嘘っぱちなら？表面上は涙を流したり、悲しいしぐさをしてくられても、それが演技っぽかったら？なんてリスクももちろんある。だけど、どうしても惹かれちゃうんだ。死つていう絶対の汚いモノに。しかも、人とガチンコの勝負ができるってオプション付きだもん」

僕は気分が悪くなってきた。腹の中に固形物が入っていないはずなのに、吐き出したかった。この気配は何だ？

僕はたっぷりと一分間考え、その気持ちに思い当たった。嫌悪感、だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9678f/>

プロフェッサー・マンクス

2010年10月10日21時49分発行